HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ハンムラピ紀年を廻る最近の研究
Author(s)	板倉, 勝正
Citation	北海道大學文學部紀要, 4, 95-106
Issue Date	1955
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33226
Type	bulletin (article)
File Information	4_P95-106.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ハンムラピ紀年を廻る最近の研究

板倉勝正

ハンムラピ紀年を廻る最近の研究

板倉勝正

オリエントの紀年は最近著しい変改を蒙つた。それは一つには比較層位学的研究の発達によつてその上限が引下げられ且著しくその確実性を増したこと、(*)二つには新史料の発見とそれに基づく旧史料の再検討とによつて従来最も不明であつた前二千年紀前半の紀年が明確にされたことゝに拠る。特にマリ Mari 文書の発見とコルサバッド王名表 Chorsabad List の発表とは、バビロン第一王朝の年代をほゞ二世紀引下げ、これによつて嘗つてオリエントを通じて認められた不可解な空白（アマルナ時代以前の二世紀は全く史料を缺き所謂蠻族支配の下における暗黒時代と考へられてゐた）は実は存在しなかつたことが明らかにされた。しかしなほその中心となるバビロン第一王朝の紀年については相当大きな見解の相違があり、且つその論拠も複雑多岐であつて、その一致は容易に望めない現状にある。以下はこの「解き難い複雑な」問題(**)についての研究史的メモにすぎない。なお本稿において書名・雑誌名の略符号は慣例により、又人名・地名の飜字 Transcription はそれぞれの著者の用ひる処に従つて敢へて統一しなかつた。(***)

(*) cf. V. G. Childe : New Light on the most Ancient East (1954)

(**) Th. Jacobsen : The Sumerian King List (1939) p. 191.

(***) なお Bibliographie については Jacobsen, op, cit. A. Moortgat ; Aegypten und Vorderasien (1951) A. Parrot, Archéologie Mesopotamienne Ⅱ (1953) 等の Bibliographie をみよ。

〔Ⅰ〕

バビロン第一王朝（ハンムラピ王朝）の紀年は(1)バビロニヤ・アッシリヤ史にとつて特に重要な地位を占めてゐる。それは重要なシュメル王名表の殆んどすべてがこの王朝の直前に編纂されて居り、(2)又バビロニヤ紀年の骨格をなす王名表Aがこの王朝を起点として前七世紀までを誌してゐるからである。従つてこの王朝の紀年が確定されゝば、(3)これを中心としてそれ以前および以後の紀年算定に決定的な意義をもつことは明かである。

紀年算定の基礎は第一に天文観測記録から逆算して絶対年代(4)を確定することであるが、これは確実な記録の存在とその天文学的逆算の一致とが条件であつて現在まで諸権威が一致して認めるものはアッシリヤの limmu list に見える Assur-Dan 三世の 763 B.C. の皆既日蝕のみである。(5)第二は考古学或ひは古文字学によつて行はれる Sequence dating であるが、これは単に先後関係を決定するに止り、その精密度は数十年、時に数百年を以つて数へられるにすぎない。(6)最後に残るものは矢張り文献的史料であつて、これには王名表、年名表、(7)リンムゥ表以下諸王の歴史的碑文、および公私の文書がある。(8)

(1) 第二次大戦前の紀年の代表的なものを挙げれば、

	A	B	C
Ur Ⅲ	c. 2290—c. 2183	2281—2170	2328—2220
Babylon Ⅰ	c. 2050—c. 1750	2057—1758	2105—1806
Hammurapi		1955—1913	2003—1961

A〕 Th. J. Meek : Haverford Symposium on Archaeology and The Bible (1939) 159

B〕 A.Ungnad : Subartu (1936) 36

C〕 L. Delaporte : Le Proche-Orient Asiatique (1939) chap Ⅲ Tableau chronologique

(2) Th. Jacobsen : The Sumerian King List (1939) が王名表を総合的に取扱つた代表的研究である。

(3) E. Meyer : Geschichte des Altertums Ⅰ. 2. §§ 325f. ders. Ältere Chronologie Babyloniens, Assyriens und Aegyptens.

(4) 従来最も古い確定年代とされたセンプト太陽暦の採用 (4236 B. C. E. Meyer : Chronologie. 45) も最近の研究によつて疑問視されるに到つた (A. Scharff. "Bedeutungslosigkeit d. sog. ältesten Datums usw." Historische Zeitschrift 1940) なほ H. Bengtson : Einführung in die alte Geschichte (1949) 24. anm. 1.

(5) A. Ungnad : "Eponymen" (Reallexikon d. Assyriologie Ⅱ.) 415, 422, 430, 432 および H. R. Hall : Ancient History of the Near East (1932) 15-16 Cambridge Ancient History Vol. Ⅰ. 149.

Geschichte des Altertums. Ⅰ. 2. § 432 a. etc. 「Bur-sagal の limmu 職 (Assur- Dan の治世第九年) にあつた年、アッシュール市の叛乱、シワンの月の日蝕」とある。即ち同年六月十五日、ニネヴェから見えた皆既日蝕である。

limmu とはギリシャの Archon ローマの consul の如き一年交代の重要官職であつて、アッシリヤ史における年代は殆んど limmu 名の記載があり、この制度は Külteppe 文書 (ウル第三王朝) 以来引続き行はれてゐる。

(6) 最近の R C^{14} の精密度が更に高められれば、紀年学は根本的に革新されるのであらうが現在の処まだ試験的段階に止る (F. E. Zeuner : Dating the Past (1951) chap Ⅹ B Appendix 415 ff.

(7) 重要事件を以つて年名とすることは已にアッカド朝から始まる Thureau Dangin : Sumerische u. akkad. Königs in schriften. 225 ff.) 年名表を詳細に扱つたものは A. Ungnad : "Datenlisten" (Reallexikon der Assyriologie Ⅱ 131-184) バビロン第一王朝だけの集成は M. Schorr : Urkunden des altbabylonischen Zivil- u. Prozessrechts 582-614.

(8) 従来の紀年の基礎については E. Meyer. op. cit. S. Smith. Early History of Assyria (1927) Appendix : Chronology. pp. 343-365. 397-369. S. A. Cook : Chronology (C. A. H. Ⅰ. pp.145-156)

この中最も確実なものはアッシリヤのリンムウ表であつて現存するものは Adad-nirari Ⅲ (911-890B.C.) から Assur-ban-apli (669-625B.C.) に及んでおり、その下限は有名な Ptolemaios の Kanon と接続して更に確実性を増している。

〔Ⅱ〕

若し確実な天文学的記録が存在し、その計算が一致を見るならば歴史家は最早絶対年代の確定について口を挟む余地はない。そこでまず天文学から始めよう。

歴史学の側から提出された最近の紀年の変化に応じて、嘗つて見捨てられた Ammizadugga の金星観測記録の天文学的再検討が採り上げられるに到つた。[1] これは Assur-ban-apli の図書館出土の断簡で Ammizadugga の第六年における金星のあさで (Heliacal Rising) の記録であるが、諸権威の間の計算の結果が全く一致せず、かつ遥か後代の筆写であるために久しく省みられなかつたものである。[2]

バビロン第一王朝の王名、父子関係、治世年数はすべて分つてゐるから、[3] この絶対年代が分れば全王朝のそれも亦確定する筈である。O. Neugebauer は S. Smith の紀年に対する批判において[4] ハンムラビ即位の年は天文学的に 1856, 1848, 1792, 1736 B.C. のいづれかの中であるとした。[5] 然るに M. B. Rowton[6] によれば、この同じ年は 1792, 1728, 1736, 1664 B.C. の四つの可能性があるという。これらの Variation は全

ハンムラピ紀年を廻る最近の研究

板倉勝正

オリエントの紀年は最近著しい変改を蒙つた。それは一つには比較層位学的研究の発達によつてその上限が引下げられ且著しくその確実性を増したこと,(*)二つには新史料の発見とそれに基づく旧史料の再検討とによつて従来最も不明であつた前二千年紀前半の紀年が明確にされたことに拠る。特にマリ Mari 文書の発見とコルサバッド王名表 Chorsabad List の発表とは、バビロン第一王朝の年代をほゞ二世紀引下げ、これによつて嘗つてオリエントを通じて認められた不可解な空白（アマルナ時代以前の二世紀は全く史料を缺き所謂蠻族支配の下における暗黒時代と考へられてゐた）は実は存在しなかつたことが明らかにされた。しかしなほその中心となるバビロン第一王朝の紀年については相当大きな見解の相違があり、且つその論拠も複雑多岐であつて、その一致は容易に望めない現状にある。以下はこの「解き難い複雑な」問題(**)についての研究史的メモにすぎない。なお本稿において書名・雑誌名の略符号は慣例により、又人名・地名の飜字 Transcription はそれぞれの著者の用ひる処に従つて敢へて統一しなかつた。(***)

(*) cf. V. G. Childe : New Light on the most Ancient East (1954)

(**) Th. Jacobsen : The Sumerian King List (1939) p. 191.

(***) なお Bibliographie については Jacobsen, op. cit. A. Moortgat ; Aegypten und Vorderasien (1951) A. Parrot, Archéologie Mesopotamienne Ⅱ (1953) 等の Bibliographie をみよ。

〔Ⅰ〕

バビロン第一王朝（ハンムラピ王朝）の紀年(1)はバビロニヤ・アッシリヤ史にとつて特に重要な地位を占めてゐる。それは重要なシュメル王名表の殆んどすべてがこの王朝の直前に編纂されて居り、(2)又バビロニヤ紀年の骨格をなす王名表Aがこの王朝を起点として前七世紀までを誌してゐるからである。(3)従つてこの王朝の紀年が確定されゝば、これを中心としてそれ以前および以後の紀年算定に決定的な意義をもつことは明かである。

紀年算定の基礎は第一に天文観測記録から逆算して絶対年代(4)を確定することであるが、これは確実な記録の存在とその天文学的逆算の一致とが条件であつて現在まで諸権威が一致して認めるものはアッシリヤの limmu list に見える Assur-Dan 三世の 763 B.C. の皆既日蝕のみである。(5)第二は考古学或ひは古文字学によつて行はれる Sequence dating であるが、これは単に先後関係を決定するに止り、その精密度は数十年、時に数百年を以つて数へられるにすぎない。(6)最後に残るものは矢張り文献的史料であつて、これには王名表、(7)年名表、リンムゥ表以下諸王の歴史的碑文、および公私の文書がある。(8)

(1) 第二次大戦前の紀年の代表的なものを挙げれば、

	A	B	C
Ur Ⅲ	c. 2290—c. 2183	2281—2170	2328—2220
Babylon Ⅰ	c. 2050—c. 1750	2057—1758	2105—1806
Hammurapi		1955—1913	2003—1961

〔Ⅲ〕

一九三五年 A. Parrot の指揮するフランス発掘隊はエウフラテス中流の古都 Mari の遺跡 (tel Hariri) を発見し、その王宮図書館から多数の重要文書を発掘した。[1] Thureau-Dangin は直ちにこれを解読しその重要な一部を発表して学界の注目を浴びた。[2] これによつてアッシリヤの Shamshi-Adad 一世は Mari の王 Jahdun-Lim と同時代であり、また Jahdun-Lim の子 Zimri-Lim は有名なハンムラピと同時代であることが明かにされた。[3] 即ちアッシリヤの Shamshi-Adad Ⅰ は一時 Mari を征服してその子 Jasmah-Adad をその王としたが[4] Shamshi-Adad の死後旧王朝が再び主権を恢復して Zimri-Lim が王位に即いたのであつてこれを表示すれば次の如くなる。

Assur	Mari	Babylon
Ilakabkabu	Igit-Lim	
Shamshi-Adad Ⅰ	Iahdun-Lim	
Ishme-Dagan Ⅰ	Iasmah-Adad (Shamshi-Adadの子)	Sin-mubalit / Hammurabi
	Zimri-Lim (Iahdun-Limの子)	

即ち Shamshi-Adad Ⅰ は従来考へられた如くハンムラピの死後数十年にして即位したのではなく、[5] ハンムラピ即位以前にすでに強大な君主だつたのである。[6]

この両者の関係についての明確な証拠はない。Zimri-Lim ががアッシリヤ支配を顚覆して即位したのは明らかに Shamshi-Adad Ⅰ の死後であり、[7] 又年名表によれば Zimri-Lim は三十二年間統治した後ハンムラピに亡されてゐるから、[8] この年が一般に考へられてゐる様にハンムラピの即位三十四年とすれば、[9] ハンムラピの即位と Zimri-Lim の復位 (Shamshi-Adad の死後) との間は僅々二、三年にすぎない。して見るとこの両者の間に生前に何等かの関係があつたとは考へられず、前者の死の直後に後者が即位したと見るのが妥当であろう。[10] それでは次に Shamshi-Adad の在位年代についてアッシリヤ側の史料によつて検してみよう。

Shamshi-Adad Ⅰ はアッシリヤの最初の強大をなした英主であるので、[11] 後代の諸王がしばしばこれについて言及してゐる。例へば Shalmanaser Ⅰ (前十三世紀前半) はアッシュール神殿の再建碑文[12]において Shamsi-Adad Ⅰ の再建を 580 年前に、Erishum Ⅰ よる再建を更にその 159 年前としてゐる。また Essarhaddon (前七世紀前半) によれば、[13] この同じ期間をそれぞれ 434 年および 126 年としてゐる。両者の差は 179 年もあり、前者に従へば Shamsi-Adad Ⅰ は 1860 B. C. 後者に従へば 1714 B. C. となる。この場合時代の近い前者の方がより正確であらうことは常識的に考へられる処であるし、その典拠となつた史料も後者の場合は五百年の間に前者の利用し得たものよりは遙かに減少してゐたことは明かである。[14] 然るにコルサバッド史料の発見はむしろその逆の証拠を提供してゐる様に見える。

(1) Archives Royales de Mari (AMR) Ⅰ. G. Dossin : Correspondance de Shamsi-Addu (1946) Ⅱ. Ch.-F. Jean : Lettres diverses (1941) Ⅲ J.-R. Kupper : Correspondance de Kibri-Dagan (1948) G.Goossens : Classment des Archives Royales de Mari (R. A. 1952)

(2) Thureau-Dangin : Jasmah-Adad (R. A. 1937)

(3) J. R. Kupper : Nouvelles Lettres de Mari relatives a Hammurabi (R. A. 1948) および AMR Ⅱ no. 18.

(4) AMR Ⅰ no. 3 の祈禱文に「Igit-Lim は Ilakabukab に罪を犯せる故に

神は Ilakabukab を助けたまひて IahdumLim の国を征服せり云々」と見える（前表参看）。なほ L. Oppenheim : The Archives of the Palace of Mari (J. N. E. S. 1950) 130 をみよ。又更に古き時代におけるアッシリヤのバビロニヤ侵略は Shamshi-Adad より約十代前の Ilushuma の碑文に「……ウル・ニップール……に自由を確立せり云々」と見える（C. J. Gadd : History and Monuments of Ur (1929) 158.

(5) S. Smith : Early History of Assyria 170-1. Table 4. 但し Weidner は已に一九三六年において両者をすこぶる近く考へ Hammurapi (1955-191 3) Shamshi-Adad I (1892-1860) としてゐる。E. F. Weidner : Zeittafel (bei B. Meissner : König Babyloniens und Assyriens)

(6) Weidner は Thureau-Dangin の前掲論文について "Der Synchronismus ist dort einwandfrei bewisen" といつてゐる〔A. f. O. (1938) 198. Anm. 21〕但し Jacobsen は前二千紀前半におけるアッシリヤ史料による Synchronism を信用しない。Sumerian King List (1939) 193.

(7) Ishme-Dagan が父の死をその兄弟 Mari の王 Jasmah-Adad に知らせた手紙がある。J. R. Kupper. (R. A. 1948) 従つて Shamshi-Adad I の死はハンムラピの Mari 征服以前でなければならない。

(8) Rowton : Tuppu etc J. A. O. S. (1951) p 202 (n) 73

(9) ハンムラピの年名表に Mari を攻めた記事の見えるのは三十三年と三十五年であり、後者については「Mari の城壁を破壊した年」と誌してゐる。〔Ungnad : Datenlisten, nr. 135, 137. (R. L. A. II. s. 180-181)〕年名は前年の最大事件を以つて名付ける習慣であつたとすればこれは治世三十四年に当る。

(10) ハンムラピは法典の序文にアッシュールおよびニネヴェを支配したことを誌してゐる。(Col. IV. l. 55. および l. 60) 更に Larsa の知事 Sin-iddin-nam に与へた命令書にアッシュール市駐屯の軍隊を速かに本隊に合せしめることを命じてゐる（L. W. King : Letters and Inscriptions of Hammurabi vol. III no. 1 A. Uugnad : Babylonische Briefe, nr. 40)ことは彼のアッシリヤ支配を証拠立てる。からした事実は Shamshi-Adad I が強大な君主として健在であつた時期には考へられず、従つてハンムラピの強大をなしたのはその死後であるとの推定を裏付ける。なほ B. Meissner : Könige Babyloniens u. Assyriens. 95. をみよ。

従来マリ文書で Rim-Sin, Hammurapi, Zimri-Lim などと同時代である事が確定されてゐる Eshnunna の王 Ibal-pi-el の年代不明の年名に「Shamshi-Adad の没した年」と見える。E. Ebeling : "Daten von Aschjaly" (R. L. A. II, 195.) A. Ungnad : Eine neue Grundlage für die altorientalische Chronologie〔A. f. O. (1940) 145.〕なほ Sippar 出土の法律文書によればハンムラピの即位十年に Shamshi-Adad が未だ在世してゐた証拠がある。

「Marduk,…Hammurapi および Shamshi-Adad の名に拠りて〔以上の如く誓約せり〕」…Malgum の撃たれし年のテベツの月」(Kohler-Ungnad : H. G. III nr. 710. Schorr : Urkunden nr. 284)この年はハンムラピの年名を検するとその即位十年に当る（Ungnad : Datenlisten〔R. L. A. II. 178 nr. 112〕)

なほ Assur A 表によれば Shamshi-Adad I に到るアッシリヤ歴代の王名は左の如くである。〔III〕の注(3)の表を参照せよ。）

Puzur-Ashur I
Shalim-akhum
Ilushuma (a)
Irishum I
Ikunum
Sharrukin I
Puzur-Ashur II
Akhi-Ashur
Rim-Sin (b)
Irishum II
〔Assur〕
〔Izkur-sin〕
〔Irishum III〕
Shamsi-Adad I.
Ishme-Dagan I.

(a) これがバビロン第一王朝の始祖スム・アブと同時代人なることは L. W. King : Chronicles concerning the early Babylonian Kings. II. 14 なほ S. Smith : Early History of Assyria. Chronological Table 4. および Delaporte : Le Proche-Orient Asiatique. Tableau chronologique を見よ。

(b) これが有名な Larsa の Rim-Sin と同一人であることは B. Meissner : Könige Babyloniens und Assyriens, 291. Anm. 4 および S. Smith : E.

H. A. 183-4 を見よ。アッシリヤの王名は特徴的な形をもち、しばしば数名の王がこれを名乗り、(例へば Adad-nirari を称するものは六人 Shamshi-Adad は五人 Tiglat-pileser は三人)、又バビロニヤの王名と合致するものは殆んどない (Sharrukin, Ishme-Dagan は稀な例外)。Rim-Sin の名はアッシリヤ史を通じてこの場合只一回であることは一つの傍証となすに足りる。但し Khorsabad List にはこれを缺く。Ⅳの注(4)の表参看)

(11) A. Moortgat : Vorderasien 291 f. S. Smith : Early History of Assyria. 197 ff.

(12) Keilschrifttexte aus Assur historischen Inhalts. nr. 13.

(13) ibid nr. 51. 126.

(14) Meyer : Chronologie 16-17. Hall : Ancient History 28-29. Parrot. op. cit. 363-5. Jacobsen ; op. cit. 192-3.

〔Ⅳ〕

これはシカゴ大学の東洋研究所が、1932/33 のシーズンに Khorsabad (Dur-sharrukin) から発掘し、当時の所長故 J. H. Breasted が A. Poebel に飜訳出版を委嘱したもので長くその発表が期待されてゐたが十年後に漸くその約を果したものである。[1] 極めて良く保存された縦七・二五吋、横五・二五吋のタブレットで、最古の Tudia より Assur-nirari Ⅴ に到る百七人の王名が父子関係および統治年数その他と共に誌されて居り、[2] その跋文に「アルベラの神殿書記 Kandilanu がアッシュール総督 Adad-EN-GIN の第二 limmu の Lulubi の月の二〇日に、アッシュール市の王名表に拠り書写した」事が誌されてゐる。この日付は limmu list によれば Tukulti-apil-Esharra Ⅲ (王名表で百八代) の治世第七年に当る (738 B. C.) これは従来知られてゐた Assur A および B とよく一致し Poebel は Assur A の複本であらうとしてゐる。[3] 然るに発掘の際の不注意によつて (65) Assur-rabi Ⅰ と (66) Assur-nadin-ahhe の二代の統治年数が缺けてゐることと、Assur A との不一致[4]が問題を一層複雑化し、こゝに重要な (39) Shamshi-Adad Ⅰ の年代に関して種々の異論が生ずるに到つた。即ちテキストの校訂者 Poebel は 1726-1694 B. C. とし、[5] Albright は二代の間隙に二十二年をあてて 1748-1716 とし、[6] Smith は依然後代のアッシリヤ王の碑文によつて 1820—1740 の線を堅持してゐる。[7] 然し缺文は別としても Assur A と Chorsabad Lits の何れを採用すべきか、或ひは後代のアッシリヤ碑文の信憑度[8]など問題は尽きない。

(1) The Assyrian King List from Khorsabad (J. N. E. S. 1942—1943, なほ E. Cavaignac : Les Listes de Khorsabad (R. A. 1945-6) A. Parrot Archéologie Mesopotamienne (1953) 347-365.

(2) これは大きく四つのグループに分けられ、第一は Tudia より Apishal に到る十七代で「テントに住んでゐた (遊牧の意か?)」と注されて居り、そのうち十五代までは従来全く知られなかつた名前である。父子関係・統治年数を缺く。第二は第二十六代に到る十王で父子関係が誌してあり、第三は三十二代 Ilushuma に到る六人で父子関係・統治年数を缺く。Poebel は三十三代の Erishum Ⅰ に始る第四のグループ (父子関係・統治年数が完備する) から limmu list が始まると推定してゐる。

(3) Assur A は Khorsabad List での九十七代 Tiglathpileser Ⅱ までを誌してゐるので恐らくその次代 Assur-Dan Ⅱ の治世のものであり、B は断簡であるが更に六、七代古いと考へられてゐる。

(4) Parrot.op. cit 352. その相違の箇所を表示すれば次頁の表の如くになる。

(5) J. N. E. S. (1942) 293. なほ G. Dossin もこれを支持する Correspondance de Shamshi-Addu Ⅰ. (1726-1694 a. J.C.) [Bulletin de la Classe des Lettres. Academie royale de Belgique. 1948. 59-70 (未見)]

(6) Bibliotheca Orientalis (1948) 125. なほ Rowton も前掲論文 (Ⅲ注(6)) においてこれを支持してゐる。Rowton 論文については三笠宮の紹介

Chorsabad (a)	Assur A (b)
30) Puzur-Ashur Ⅰ	
31) Shalim-Akhum	
32) Ilushuma	
33) Erishu (Ⅰ)	
34) Ikunum	
35) Sharrukin Ⅰ	
36) Puzur-Ashur Ⅱ	
37) Naram-Sin	
38) Erishu Ⅱ	
39) Shamsi Adad Ⅰ	
40) Ishime-Dagan Ⅰ	
	(1) Erishu Ⅰ
	(2) Ikunum
	(3) Sharrukin
	(4) Puzur-Ashur
	(5) Ahi-Assur
	(6) Rim-Sin
	(7) Erishu Ⅱ
	(8) 〔 〕Assur
	(9) Izkur-Sin
	(10) Erishu Ⅲ

a) A. Poebel : The Assyrian King List from Khorsabad (Journal of Near Eastern Studies, 1942.)
E. Cavaignac : Les Listes de Khorsabad (Revue d' Assyriologie, 1945-6)

b) E. F. Weidner : Die grosse Königsliste aus Assur 〔Archiv für Orientsforschung (1927)〕
がある（史学雑誌第61巻第12号）。

(7) Alalakk and Chronology (1940) A. J. A (1945)

(8) Ⅲの注 (11) (12) (13) (14) 勿論後代の筆写・逆算に拠る記録の多くは信憑すべきではない。例へば新バビロニヤのナボニドスはアッカッドのサルゴンを自分より三千二百年以前（即ち3750 B. C.）と計算し (L. W. King : History of Sumer and Akkad 61.)、ハンムラピをブルナブリアッシュ以前七百年（即ち 2225 B. C.）と計算してゐるが (L. W. King : History of Babylon, 110, 111) いづれも甚しく過大である。

〔V〕

シリヤ考古学の発達によつてオリエントの比較層位学的研究がエヂプト・メソポタミヤから更にクレタにまで拡大され、この広大な地域に渉る比較研究が確立されつゝあるのは第二次大戦後の注目すべき事実である。(1)

S. Smith は北シリヤの Alalakk (tel Atchana) の発掘に基いて次の如き重要な事実を明かにした。(2) 即ち Ugarit (Ras Shamra) の層位的研究に拠れば、メソポタミヤの影響が現はれるのはエヂプト第十二王朝のシリヤ徹退 (c. 1800 B. C.) 以後であり、(3) 従つてハンムラピのシリヤ支配は当然それ以後と想定され、これは Alalakk の結果と一致する (左表)。(4) Alalakk の発掘者 L. Woolley も強くこれを支持してゐる。

Level Ⅷ 第十二王朝期
Level Ⅶ Yamkhad の宮殿（ハンムラピ時代）(5)
Level Ⅵ Megiddo Ⅹ, Ⅸ (6) Murshilish Ⅰ の攻略 (7)
Level Ⅴ Thutmes Ⅲ の攻略 (1468)

更に Smith は南部クレタの Messara 平原の Tholos B 出土のバビロン第一王朝時代のシリンダーが、エヂプト第二中間期 Second Inter-

mediate Period に属する甲虫および中期ミノス第一層a (M. M. Ia) の土器と伴出することを以つて自説の High Chronology (即ちハンムラビを 1792–1750 B. C. とする) の証拠とし[8]これに対し Albright は Tholos B の年代を遥かに下算して 1750–1725 B. C. とし、これによつて自説の Low Chronology (ハンムラビ 1728–1686) に有利な証拠と考える[9]。

Albright は更に Zimri-Lim が黄金の壺を贈つた Byblos 王 Ia-an-tin-ha-mu をヒエログリフに見える n-t-n と同一人物であるとし、これはエヂプト第十三王朝の Nefer-hetep (Albright によれば 1741–1780 B. C.) に仕くた Byblos 王であつてほゞ 1740–1720 B. C. に当り、従つてハンムラビの三十一年 (Albright によれば 1697 B. C.) に亡くされた Zimri-Lim (1730–1700) の同時代人としてすこぶるよく合致する。High Chronology を採る時は両者の間に半世紀の隔りを生じ事実に合致しないという[10]。

然しこの両者が同一人であるか否かは先づ問題であり、次にエヂプト第十三王朝の紀年については未だ確定的な意見の一致は見られない[11]。

更に前十七世紀以前の中期ミノスの層位についてはクレタ考古学においても論争が多く、この場合稍々水掛論の嫌いがなくはない[12]。

Ⅷ	第十二王朝期 (1900–1780)	
Ⅶ	Abban 王朝 (ハンムラビ–リム・シン時代) (1780–1750)	
Ⅵ	(1750–1595) Murshilish Ⅰの攻略 (1595)	
Ⅴ	A〕(1595–1527) B〕(1527–1447) Thutmes Ⅲ の攻略 (1483)	

(1) H. J. Kantor : The Aegean and the Orient in the Second Millennium B. C. (1947) なほ G. Vercoutter の批評 L' Egée et L' Orient an Deuxième Millénaire av. J.-C. 〔J. N. E. S. (1951) 205 ff〕

(2) Alalakk and the Chronology (1941) Parrot : 391–394.

(3) マリ文書にはエヂプトのシリヤ支配を思はせる記事がない Cf. M. B. Rowton : Tuppu and the Date of Hammurabi J. N. E. S. (1951) P. 203 S. Smith. op. cit. 15.

(4) L. Woolley : A Forgotton Kngdom (1953) 193.

(5) Smith. 8.

(6) 〃 9.

(7) 〃 36.

(8) Middle Minoan Ⅰ-Ⅲ and the Babylonian Chronology. A. J. A (1945)

(9) Bibliotheca Orientalis (1949) 126.

(10) B. A. S.O. R. 99. (1949) 9-18 A. Parrot. op. cit. 388-389. B. M. Rowton : op. cit 203. (n) 77.

(11) H. E. Winlock : The Rise and Fall of the Middle Kingdom in Thebes (1947) なほ第十二王朝の紀年の天文学的研究については O. Neugebauer. op. cit. 60, 61 をみよ。

(12) R. W. Hutchinson ; Notes on Minoan Chronology (Antiquity. 1948)

(12a) メソポタミヤでもバビロン第一王朝の文化層とカッシイト朝のそれとは考古学的に著しく異つてゐないことは両者の年代的隔りが甚しくないことを物語つてゐる。(A. Parrot. 384-5)

〔VI〕

バビロン第一王朝が第十一代 Samsuditana の時ヒッタイトの Murshilish 一世の急襲によつて亡び、以後バビロニヤ史が大きく転廻し「山岳民族」争覇の舞台となつたことは広く認められてゐる。[1] このバビロン王朝の終末を劃する重要な年代は諸家によつて色々な推算がなされてゐるが、A. Goetze は最近 Shuppiluliumash 大王（前十四世前半）の年代からの逆算によつて重大な手掛りを提供した。[2]

従来はバビロン第一王朝の終末を（Murshilish の入寇）c. 1800 B. C. に置いたゝめ、後のアマルナ時代におけるハッチ興隆期との間に大きな間隙が考へられ、前十九世紀前後の古王国、前十四・五世紀の新王国の二つの時期が想定されてゐた。[3] 然るにマリ文書およびコルサバド・リストの発見によつてハッチ史の上限が著しく引下げられた結果この間の間隙は消滅するに到つたが、然もその下限はトトメス三世のシリヤ征服記録やアマルナ文書によつて確定してゐる以上、これより逆算すればその上限には自ら限界がなければならない。

先づ Götze はムルシルのバビロン荒掠についての代表的紀年として Thureau-Dangin (1650 B. C.) Ungnad-Smith (1595 B. C.) Albright (1531 B. C.) Weidner-Böhl (c. 1500 B. C.) の四つを挙げ、これがハッチ史に適合するか否かを検討してゐる。ハッチ史初期の王統は頗る混乱してゐてバビロニヤ・アッシリヤの如き採るべき史料が少いが、彼はボガズケゥイ出土のヒエログリフで書かれた Nisantas 文書によつて Tudhaliyash Ⅱ から Shupp iluliumash (Götze によれば 1390–1350 B. C.) に到る四王を父子継承の四代と考へる。Tudhaliyash Ⅱ がエヂプト第十八王朝のトトメス三世[4] (1485–1450) と同時代人である事は両者の歴史的碑文によつて確定されてゐる。これからムルシル一世までは合計十一（九）人の王名が知られてゐるが、その内五人については父子関係が分つて居り、又これ以外に二人の王妃が知られてゐるので[5]少く共この間に七代の経過があつたことは確実である。そして Tudhaliyash Ⅱ の下での所謂「新王国」の勃興はトトメス三世の陵夷以後、即ち 1450 B. C. と考へられる。ムルシル一世はこれより七代前であるから、この間をほゞ二百年と計算することは妥当であり、こゝに 1650 B. C. なる紀年を得る。即ち Thureau-Dangin のものが最もよく条件を満し、次いで A. Ungnad と S. Smith の 1595 B. C. も亦なほこの範囲に入るが、それより新しい年代は到底考慮の余地がないといふ。

（1） A-Moortgat, op. cit. 350–351.
（2） A. Goetze : The Predecessors of Shuppiluliumash of Chatti (Journal of American Oriental Society 1952)
（3） L. Delaporte : Le Proche-orient Asiatique, chap Ⅱ Du xviiie au XVe Siècle (p.p. 152–163)
（4） Wilson : Burden of Egyht (1951) 年表参看。
（5） ハッチでは王妃の位は一代一人の定めであつたので King List と並んで Queen List が頗る重要な地位を占めてゐる。(Götze, op.cit. p. 96 n. 3)

〔VII〕

以上の如くにしてバビロン第一王朝の紀年は全体として約二世紀引下げられ、所謂暗黒時代と考へられた Gap が消滅した事は大きな収獲である。然しまた同時にこれによつてアマルナ時代直前のオリエント政治史に根本的検討が必要となつたことも亦事実である。[1] 大体の傾向はハンムラピの時代を引下げて c. 1800 B. C. 以後に置くこと点においてはほゞ一致してゐるが、[2] これについてもなほ「王名表」に拠る諸学者の側からは理由ある不信が表明されて居り[3] Low Chronology を代表する Alb-

right も漸々として諸説の訂正を発表してゐる現状を思へば,[4] 絶対年代の決定に到るまでなほ相当の時日を必要とするであらう。従つてウィルソン[5]がエヂプト史において 2000 B.C. 前後の時代には十年,1500–1000 B.C. についても十年乃至十五年のフレを認め,モートガルト[6]がバビロニヤ史について前三千年紀には百年単位の,前二千年紀には十年単位のフレを容認してゐる態度は暫らくは認めなければなるまい。

結局ハンムラピ紀年の問題は「決して議論の余地のない新事実の発見によつてではなく,それ自身としては部分的の証拠力しかもち得ぬ事実の推積ねによつてのみ解決せられるであらう。」[7]

(1) 例へばハンムラピはメソポタミヤの完全な支配者である様に考へられて来たが,Mari 文書その他に拠ればその支配権の内容は彼自身が法典序文に誇つてゐる程には絶大なものでなく,シュメル・アッカド時代の覇者と左程異ならなかつたのではあるまいか。またアナトリヤ・シリヤ等に対するハンムラピの支配も或ひは単にウル第三王朝以後形成されて来たバビロニヤ世界—バビロンをその内の一勢力として,他にイシン・ラルサ・マリ etc を含むところの—全体の影響として見らるべきなのではなからうか。マリの王 Zimri-Lim のバビロン駐在大使が当時の政治情勢を報告した手紙に「バビロンのハンムラピに従ふもの十—十五王,ラルサのリム・シンに従ふもの同じく十—十五王,これに対して Yamkhad (Alalakh) の Yarim-Lim に従ふ王は二〇人に達する云々」と言つてゐるのは示唆的である (L.Woolley:A Forgotten Kingdom. 67.)

(2) ソヴィエトの古代史家ストルーヴェも Smith 説 (1792–1750 B.C.) を支持してゐる。La datation de la Ier dyvastie babylonienne (V.D.I. 1947 1.) [R. A. (1950) 102 による] 但し K. Ploetz は A.Moortgat (op. cit Zeittafel) と共に Albright 説 (1726–1686 B.C.) を採つてゐる。 Auszug aus der Geschichte (1951) 51.

(3) Th. Jacobsen : The Sumerian King List 191–194, 193. n. 6 a.

(4) W. F. Albright : The Chronology of King Hamurapi (Bibliotheca Orientalis 1948.) 彼は 1942 年に三回目の訂正を試み (A Third Revision of the early chronology of Western Asia) 1952 年と 1938 年の最初の論文 (A Revolution in the Chronology of Ancient Western Asia) 以来七回目の訂正を出してゐる (Further Observations on the Chronology of the early Second M. B. C. [未見])

(5) J. A. Wilson : The Burden of Egypt. (1951) vii.

(6) A. Moortgat : Aegypten u. Vorderasien. (1950) 315.

(7) M. B. Rowton : op. cit. 203.